（11 月 29 日）「出エジプト記 33：7～11」
主は人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた。モーセは宿営に戻ったが、彼の従者である若者、ヌンの子ヨシュアは幕屋から離れなかった。
（出エジプト記 33 章 11 節）

・昨日の箇所で、「わたしはあなたの間にいて一緒に上ることはない」と宣言された神さまですが、モーセと語る場所は設けました。それが臨在の幕屋（新しい聖書では「会見の幕屋」）です。
・モーセが天幕に入ると、雲の柱が降りて来て天幕の入り口に立ちます。それが神さまが天幕に入られたしるしとなりました。人々はその出来事によって、どれだけの安心感を得ることができたことでしょう。
・モーセと神さまは、顔と顔を合わせて語り合ったそうです。当時、神さまの顔を見ると死ぬ、とされていました。その中でのこの描写は、モーセがかなり特別な預言者であったことを示しています。

（11 月 30 日）「出エジプト記 33：12～16」
お願いです。もしあなたがわたしに御好意を示してくださるのでしたら、どうか今、あなたの道をお示しください。そうすれば、わたしはどのようにして、あなたがわたしに御好意を示してくださるか知りうるでしょう。どうか、この国民があなたの民であることも目にお留めください。
（出エジプト記 33 章 13 節）

・モーセの不安は、33 章 2 節に書かれている「私はあなたに先立って使いを差し向け」という神さまの言葉が本当なのかどうか、ということのようです。
・モーセにはその「使い」について知らされておらず、どうやって示された道を歩んで良いのかわかりませんでした。イスラエルの民を預かっている立場から、モーセは神さまに語ります。
・その内容は、「食ってかかっている」と捉えられても仕方のないものです。しかし神さまはその訴えに丁寧に耳を傾けているようです。「旧約の神」の認識が、少し変わってきます。

2023 年 11 月

創世記・出エジプト記　　通　読

11 月

（11 月　1 日）「出エジプト記 27：1～8」
灰を取る壺、十能、鉢、肉刺し、火皿などの祭具はすべて青銅で作る。
（出エジプト記 27 章 3 節）

・奈良基督教会にも「祭壇」があります。現在の聖餐式では、チャンセルの真ん中あたりにある「聖卓」で感謝聖別などの準備をしていますが、文語祈祷書が用いられていた頃は奥にある「祭壇」を使っていました。
・といいましても、教会には灰を取る壺や十能、鉢、肉刺し、火皿などはありません。なぜなら元々祭壇は「神さまに犠牲の動物をささげるための場所」でしたが、イエス様の十字架によるただ一度の贖いによって、動物のいけにえは必要なくなったからです。
・しかし祭壇そのものが「用なし」になったわけではありません。聖餐式をおこなうたびに、わたしたちのために血を流された方がいるということ。そしてその血の贖いによって、わたしたちは生かされているということを思い起こすことが大切なのです。

（11 月　2 日）「出エジプト記 27：9～19」
また、幕屋で祭儀に用いる祭具、幕屋や庭の杭などすべては青銅で作る。
（出エジプト記 27 章 19 節）

・神さまは、幕屋を囲む庭についても指示を出します。新共同訳聖書では「～で張る」とか「～で作る」と書かれていた部分が、新しい聖書では「でなければならない」と変わっています。命令の意味合いが強くなったような気がします。
・聖書を読んでいくと、使用する材料やサイズ、量に至るまで細かく決められています。それはなぜでしょうか。神さまはご自分の力を知らしめるために、人々に対して大変なことを命じているのでしょうか。
・神さまが細かく指示を出す理由の一つに、「人々が自分の言いつけを守るかどうか確かめたい」という思いがあったようです。人々は本当に自分を必要としているのか、そのことを神さまはとても気にされていたのかもしれません。

（11 月 27 日）「出エジプト記 32：30～35」
今、もしもあなたが彼らの罪をお赦しくださるのであれば……。もし、それがかなわなければ、どうかこのわたしをあなたが書き記された書の中から消し去ってください。
（出エジプト記 32 章 32 節）

・モーセはイスラエルの民の罪の贖いのために、神さまの元に登っていきます。彼らの罪が赦されないのならば、自分の名前がいわゆる「命の書」から消されても構わないという強い決意がモーセにはありました。
・神さまは、裁きの日に彼らの罪を罰すると告げます。そして同時に、神さまは民を打ちます。それがどれくらいの数なのかは書かれていません。「罪を犯した」というくくりで言えば、相当な数になりそうです。
・一つ気になるのは、アロンが罰せられていないところです。普通に考えれば、金の子牛を造ったときの民のリーダーはアロンです。しかし神さまはアロンを打っていません。それはなぜなのでしょうか。

（11 月 28 日）「出エジプト記 33：1～6」
民はこの悪い知らせを聞いて嘆き悲しみ、一人も飾りを身に着けなかった。
（出エジプト記 33 章 4 節）

・金の子牛の事件は、尾を引きます。神さまは「約束の地」に行くように促すとともに、「わたしはあなたの間にいて一緒に上ることはない」と明言されました。民の間から離れるということです。
・昼は雲の柱、夜は火の柱として民を導いてきた神さまですが、「一緒にいるといつあなたがたを滅ぼしてしまうかわからない」というのがその理由です。お互いケンカが絶えないので、ちょっと距離を取りましょうという感じでしょうか。
・人々は自分たちの行動が原因とはいえ、この神さまの判断にはショックを覚えていたことでしょう。これが何を意味するのかはわかりませんが、彼らは身に着けていた飾りを外しました。しかしもしかしたら、すぐに怒る神さまが離れてくれて、ホッとした人もいるかも。

（11 月 25 日）「出エジプト記 32：15～24」

わたしが彼らに、『だれでも金を持っている者は、それをはずしなさい』と言うと、彼らはわたしに差し出しました。わたしがそれを火に投げ入れると、この若い雄牛ができたのです。

（出エジプト記 32 章 24 節）

・モーセとヨシュアが山から下りてくると、民の歌声が聞こえてきます。そして宿営に近づくと、金の子牛の像とその周りで踊る民の姿がモーセの目に入ります。モーセは怒り、次の行動を起こします。
・まず神さまから頂いた二枚の掟の石板を投げつけ、山の麓で打ち砕きました。それほど見境なく怒ったということでしょう。そして金の子牛を火に投げ入れ、粉々にして水の上にまき、民に飲ませたということです。
・モーセはアロンを叱責します。しかしアロンは民の悪意を強調し、また金を火に投げ入れたら子牛になって出てきたと言い訳します。けれども 32 章の最初から読んでいる読者は、アロンの罪を良く知っています。

（11 月 26 日）「出エジプト記 32：25～29」

レビの子らは、モーセの命じたとおりに行った。その日、民のうちで倒れた者はおよそ三千人であった。

（出エジプト記 32 章 28 節）

・モーセのアロンとイスラエルの民に対する怒りは、静まりません。モーセの怒りの中には、「敵対する者の嘲りの的になった」ということも含まれます。それはモーセの神ヤハウェが馬鹿にされているのと一緒です。
・モーセは神さまに付く者を集めます。するとレビ人がモーセの元にやって来ました。彼らは祭司職の家系です。彼らは剣を取り、自分の兄弟、友人、隣人を殺せという命令に従います。彼らがその日殺害したのは、3000 人にも上りました。
・3000 人というと、大変な数です。それだけの同胞を殺すことで、彼らレビ人は祝福を得ることになります。しかし彼らも、金の子牛事件のときは一緒にいたはずです。その罪は問われないのでしょうか。

（11 月　3 日）「出エジプト記 27：20～21」

常夜灯は臨在の幕屋にある掟の箱を隔てる垂れ幕の手前に置き、アロンとその子らが、主の御前に、夕暮れから夜明けまで守る。これはイスラエルの人々にとって、代々にわたって守るべき不変の定めである。

（出エジプト記 27 章 21 節）

・カトリックや正教会、また一部の聖公会の教会には、「タバナクル」というものがあります。これは聖別されたパンを病者訪問などのために保存する入れ物のことです。また 25 章 10～22 節にも出てきた掟の箱（契約の箱）も「タバナクル」と呼びます。
・神さまは掟の箱の手前に常夜灯を置き、夕暮れから夜明けまで守るように命じます。「神の臨在」を周囲に知らしめることが目的なのでしょう。
・カトリック教会や聖公会の教会でも「タバナクル」に聖品（聖別されたパン）が保存されているときには、赤いランプを点灯させて示すところがあります。「神の臨在」を示す「常夜灯」の意味合いもあるのでしょうか。

（11 月　4 日）「出エジプト記 28：1～5」

あなたは、わたしが知恵の霊を与えたすべての知恵ある者たちに説明して、わたしの祭司として聖別されたアロンのために祭服を作らせなさい。

（出エジプト記 28 章 3 節）

・わたしが聖公会の礼拝に初めて参加したときに、驚いたことがあります。それは前に立っている人たちがみんな衣装を着ていたことです。昔通っていた教会では、牧師がガウンを羽織る程度でしたが。
・さらに驚いたのは、教区主教も列席した礼拝でのことです。「何か頭にかぶってる！」「手に何か持ってるぞ！」、礼拝どころではありませんでした。まさかこうして、自分も同じように祭服（式服）を着ることになるとは、思ってもいませんでした。
・このとき神さまは、祭服を作る役を「知恵ある者たち」に託します。祭司アロンのための祭服を作るために、神さまが与えられた知恵を存分に生かしなさいということです。つまり祭司が着る祭服には、神さまの思いがたくさん詰まっているのです。

（11 月　5 日）「出エジプト記 28：6～14」
印章に石の細工人が彫るように、イスラエルの子らの名をその二個の石に彫りつけ、その石を金で縁取りする。　（出エジプト記 28 章 11 節）

・まず神さまは、エフォドの作り方について説明します。エフォドとは前掛けのようなもので、前面には 12 個の石が取り付けられていました。さらにその石には、イスラエル 12 部族の名前が彫られていたそうです。
・このエフォドは、何に用いられていたのでしょう。祭司があらゆる祭儀をおこなうときに、イスラエルの民の思いも背負っていることを思い起こすためでしょうか。あるいは占いに用いたのでしょうか。
・たとえばどこかで争いが起こり、どの部族を派遣するか迷ったときに、祭司がエフォドにつけられた石を指さしながら、「ど・れ・に・し・よ・う・か・な・・・」と選んでいたりして。これは妻のアイデアですが、さすがに…という感じです。

（11 月　6 日）「出エジプト記 28：15～30」
裁きの胸当てにはウリムとトンミムを入れる。それらは、アロンが主の御前に出るときに、その胸に帯びる。アロンはこうして、イスラエルの人々の裁きを、主の御前に常に胸に帯びるのである。
（出エジプト記 28 章 30 節）

・エフォドの次は、裁きの胸当てです。エフォドは前掛けのようなものだと説明しました。胸当ても体の前方に来るものです。エフォドと裁きの胸当ては結び合わされ、セットになっていたようです。
・12 個のイスラエル部族の名が彫られた宝石が取り付けられるというのも、非常によく似ています。ただ一つ、大きな違いは、裁きの胸当ての中にはウリムとトンミムが入れられていたことです。
・ウリムとトンミムは重要な決定をする際、神さまの意思を確認するために用いるものです。「占い」に非常に近いとも言えます。なお裁きの胸当てにイスラエル 12 部族の名が刻まれた理由は、「イスラエルの人々の裁きを主の御前に常に胸に帯びる」ためだそうです。

（11 月 23 日）「出エジプト記 32：1～6」
彼はそれを受け取ると、のみで型を作り、若い雄牛の鋳像を造った。すると彼らは、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と言った。　（出エジプト記 32 章 4 節）

・モーセがヨシュアと共に山に登って、かなりの時間が経ちました。残されたアロンと民は不安になっていきます。モーセに何かあったのか、あるいはモーセが自分たちを見捨ててしまったのか、考えてしまったのでしょう。
・そこでアロンは民の求めに応じて、金の子牛の鋳像を造ります。神さまが十戒で禁止したのは彫像（彫った像）だから鋳像は OK なのだという人もいますが、後の神さまの怒りを見る限り、そうではなかったようです。
・しかも彼らは子牛の鋳像を見て、「イスラエルよ、これがあなたの神だ」と言います。完全に偶像を崇拝しているのです。「明日は主の祭りである」とアロンは告げますが、一体どの神さまが対象なのでしょうか。

（11 月 24 日）「出エジプト記 32：7～14」
どうしてエジプト人に、『あの神は、悪意をもって彼らを山で殺し、地上から滅ぼし尽くすために導き出した』と言わせてよいでしょうか。どうか、燃える怒りをやめ、御自分の民にくだす災いを思い直してください。
（出エジプト記 32 章 12 節）

・アロンとイスラエルの民が金の子牛を造ったことは、神さまの怒りを買いました。それはそうだと思います。エジプトで 10 の災いをおこし、昼は雲の柱、夜は火の柱で導き、エジプトの戦車隊は葦の海に沈めたのに、その手柄を金の子牛に奪われるとは。
・ただ神さまは、その怒りのままに民を滅ぼす前に、モーセにそのことを告げました。神さまと契約したのはイスラエルの民であって、モーセとの個人契約ではありませんでした。モーセもイスラエルの一員として、事の重大さを知る必要がありました。
・モーセはここで、神さまに食い下がります。「口下手」だったモーセが、「私を止めてはならない」と語る神さまに対して反論したのです。これは、執り成しとも言えるでしょう。その結果、神さまは災いを思い直されました。

（11 月 21 日）「出エジプト記 31：12～15」

六日の間は仕事をすることができるが、七日目は、主の聖なる、最も厳かな安息日である。だれでも安息日に仕事をする者は必ず死刑に処せられる。

（出エジプト記 31 章 15 節）

・十戒の中にあった「安息日」について、神さまは改めて命じます。20 章 8 節以下には「どのような仕事もしてはならない。あなたも、息子も娘も、男女の奴隷も、家畜も、町の中にいるあなたの寄留者も同様である」と書かれていました。

・そこでは、奴隷も家畜も労働から離れることができる日があるということを、神さまの恵みとして感じることができました。しかし今回の記述では、「必ず死ななければならない」という言葉が強く響きます。

・イエス様の時代のファリサイ派や律法学者も、この「禁止」という側面を強く意識して民を指導していたようです。もともと「恵み」の律法が、「拘束する」ものに変わっていくのです。教会の教えの中にも、そのように変質してしまったものはないでしょうか。

（11 月 22 日）「出エジプト記 31：16～18」

主はシナイ山でモーセと語り終えられたとき、二枚の掟の板、すなわち、神の指で記された石の板をモーセにお授けになった。

（出エジプト記 31 章 18 節）

・神さまは 20 章から語り続けて来られた掟を、2 枚の板に書き記してモーセに授けました。ここに何が書かれたのでしょうか。最初の十戒だけでしょうか。それとも米粒に書かれた文字のような小さな字で、すべての掟が書かれたのでしょうか。

・様々な絵画を見ると、最初の十戒だけが記されたと考えられてきたようです。また十戒も、最初の 5 つは 1 枚目、後半の 5 つは 2 枚目に書かれたというように、考えられてもきました。

・ここで覚えておきたいのは、「神の指で記された」という事実です。どういう感じで書かれたのかは分かりませんが、「神さまが直接記された」ということが重要です。神さまはモーセに、ご自分の思いを手渡されたのです。

（11 月　7 日）「出エジプト記 28：31～39」

アロンが聖所で務めをするとき、この上着を着ける。それは彼が中に入って、主の御前に出るときにも、立ち去るときにも、鈴の音が聞こえるようにして、死を招くことがないためである。　（出エジプト記 28 章 35 節）

・今日の箇所には、上着と額当ての作り方が書かれています。上着はイメージがつきやすいです。大きな布の真ん中に穴をあけてそこから首を出し、ひもで縛って上着の出来上がり！、劇などでもあっという間に役になり切れます。

・ただこの上着には、仕掛けがありました。裾の回りに金の鈴とざくろの飾りが交互につけられ、祭司が聖所に出入りするときなどには音が鳴るようになっていました。静かに入ると、神さまに殺されてしまったようです。

・そして額当てですが、純金で花模様を施し、「主の聖なる者」と彫るように指示します。この彫刻によって、祭司アロンはイスラエルの人々の聖なる献げ物に関する罪を負うことになるそうです。純金製なので、首が痛くなりそうですが。

（11 月　8 日）「出エジプト記 28：40～43」

これらの衣服を兄弟アロンとその子らに着せ、彼らに油を注いで祭司の職に就かせ、彼らを聖別してわたしに仕えさせなさい。

（出エジプト記 28 章 41 節）

・新共同訳聖書では「アロンの子らのためにも長い服を作り」となっている箇所が、新しい聖書では「短衣を作り」に代わっています。長いのか、短いのか、一体どちらなのでしょうか。

・さらに飾り帯とターバンも身につけさせます。アロンの子とは、ナダブ、アビフ、エルアザル、イタマルのことです。彼らもアロンと共に、油を注がれ聖別されて、祭司として任職されます。

・そして今日の箇所にも、「死ぬことのないように」、どのようなことに気をつけないといけないかが書かれます。神さまのために働くのに、死ととなりあわせとは、何とも大変な役割です。

（11 月　9 日）「出エジプト記 29：1～14」

わたしに仕える祭司として、彼らを聖別するためにすべき儀式は、次のとおりである。若い雄牛一頭と傷のない雄の小羊二匹を取る。

（出エジプト記 29 章 1 節）

・わたしは妻と共に、京都教区主教座聖堂（聖アグネス教会）で司祭按手にあずかりました。祭司と司祭とはその漢字も示す通り、かなり近いイメージがあるかもしれません。しかし念のために言っておきますが、わたしの按手のときに動物の犠牲は献げられませんでした。

・旧約聖書では、人の罪を肩代わりさせるために動物の犠牲が用いられています。祭司に聖別されるアロンたち 5 人についても、彼らを清めるために「贖罪の献げ物（新しい聖書では『清めのいけにえ』）」がささげられるのです。

・5 人のために連れて来られるのは、若い雄牛一頭と雄羊二匹です。それもわざわざ「傷のない」と書かれています。その動物たちを屠り、血を用いて任職をおこなうのです。ただ今日の描写はどうしても残酷に感じてしまいます。

（11 月 10 日）「出エジプト記 29：15～25」

その雄羊全部を祭壇で燃やして煙にする。これは主にささげる焼き尽くす献げ物であり、主に燃やしてささげる宥めの香りである。

（出エジプト記 29 章 18 節）

・昨日の雄牛の描写もかなり残酷に感じたのですが、今日の雄羊はもっとかもしれません。ただよく考えると菜食主義者でない限り、わたしたちは命をいただき、生かされています。わたしたちは生きるために、動物たちの血を流しているのです。

・そのことと、聖書の「献げ物」とは確かに違うかもしれません。けれども自分たちの罪や命のために、血を流すことには変わりはないのです。このような箇所を読むときに、「残酷だ」で終わるのではなく、自分の普段の姿にも目を向けたいものです。

・この箇所には、「焼き尽くす献げ物（いけにえ）」が出てきます。これは供えた物を、炭になるまで焼いてしまうことです。その匂いだけが天に届けられるので、宥めの香りと呼ばれます。地上に残るのは、食べることのできない炭だけ。文字通り、すべてを献げるのです。

（11 月 19 日）「出エジプト記 30：34～38」

その一部を細かく砕いて粉末にし、粉末の一部を、臨在の幕屋の中の掟の箱の前に置く。わたしはそこであなたに会う。これはあなたたちにとって神聖なものである。

（出エジプト記 30 章 36 節）

・続いて香です。香についても作り方が定められ、それと同じものを自分のために作ってはならないと警告されるところは油と同様です。香は気分を高揚させる作用があります。トランス状態にもなったのかもしれません。

・現在の教会でも、香がたかれることがあります。海外の教会で、大きな香炉が上からぶら下げられ、それが揺れるたびに「ブワッ」と煙が出ている場面を見たことがあります。何とダイナミックなのだと驚いた記憶があります。

・中世の教会では、「匂い消し」も大きな役目だったようです。毎日お風呂に入る習慣もなく、会衆の匂いを緩和するために振られていたそうです。現在の教会では「清める」ことが目的ですが。

（11 月 20 日）「出エジプト記 31：1～11」

わたしはダン族のアヒサマクの子オホリアブを、彼の助手にする。わたしは、心に知恵あるすべての者の心に知恵を授け、わたしがあなたに命じたものをすべて作らせる。

（出エジプト記 31 章 6 節）

・神さまはこれまで命じてきたものを、ベツァルエルに作らせることにします。またオホリアブを助手とし、さらに心に知恵のあるすべての者に知恵を授けて、すべてのものを作らせます。

・知恵は神さまが与えられるものではあるのですが、命じられたとおりに作らなかったら大変なことになることが予想できます。何で自分が選ばれてしまったのだろうと、考えはしなかったでしょうか。

・とりあえずここまでで、様々な製作物の指示は終わります。モーセとヨシュアは、これをすべて記憶できたのでしょうか。後で彼らは神さまから石の板を受け取りますが、そこにぎっしりと文字が書き込まれていたのでしょうか。

（11 月 17 日）「出エジプト記 30：17～21」
洗い清めるために、青銅の洗盤とその台を作り、臨在の幕屋と祭壇の間に置き、水を入れなさい。
（出エジプト記 30 章 18 節）

・カトリック教会に行くと、入り口付近に聖水の入った聖水盤が置かれています。信徒の方々は礼拝堂に入るとき、手を聖水に浸して十字をきる習慣があるそうです。神社の手水舎（ちょうずや）も同じような感じでしょうか。
・手足を洗い、身を清めて神さまの前に立つ。ユダヤ人はこれ以外にも、「清め」をとても重要視してきました。食事の前に念入りに手を洗うこともそうです。けが人を見かけても血に触れないために道の向こうを歩くこともそうです。
・ただここまで畏れなければならない神さまというのは、いかがなものでしょうか。礼拝の中で聖書朗読が当たったとき、間違えたら裁きを受けることになったとしたら、命がいくつあっても足りません。

（11 月 18 日）「出エジプト記 30：22～33」
あなたはこれらを材料にして聖なる聖別の油を作る。すなわち、香料師の混ぜ合わせ方に従って聖なる聖別の油を作る。
（出エジプト記 30 章 25 節）

・1 シェケルは約 11.4g、1 ヒンは約 3.8ℓ です。聖書にはそれぞれの材料とその分量が載せられていますので、つい作ってみたくなるでしょう。でも気をつけてください。これと同様に調合する者は、民から断たれてしまいます。
・油は、祝福や聖別のときに用いられます。イスラエルの王や祭司など、また祭壇や祭具などにも注がれます。「キリスト」という言葉も、「油注がれた者」をあらわすメシアという語のギリシア語訳です。
・現在でも聖公会の祈祷書には、病者訪問の式の中に「塗油の式」という式文があります。そのときにはオリーブ油を用います。またイエス様はベタニアのマリアから、香油を注がれました。油には、不思議な力があるようです。

（11 月 11 日）「出エジプト記 29：26～30」
あなたは、アロンとその子らの任職のための雄羊の献げ物のうちから、奉納物の胸の肉と礼物の右後ろ肢とを聖別しなさい。
（出エジプト記 29 章 27 節）

・奉納物として神さまの前に差し出されたもののうち、一部は祭司たちの取り分としてよかったようです。祭司の家系には土地が与えられなかったので、このようなものが日々の生活の糧となっていったのでしょう。
・ただサムエル記上 2 章 12 節以降には、祭司エリの息子たちが、ささげられたいけにえを強引に奪い取る様子が書かれています。「供え物」を自分勝手に受け取ろうとする姿は、神さまの怒りを買いました。
・またアロンに与えられた祭服は、その子孫が任職されたときには引き継がれていくようになります。先祖代々使われていった物を、継続して使っていく。とても思いのこもったものになったでしょう。

（11 月 12 日）「出エジプト記 29：31～34」
彼らは、自分たちの任職と聖別の儀式に際して、罪の贖いとして用いられた献げ物を食べる。それは聖なるものであるから、一般の人は食べてはならない。
（出エジプト記 29 章 33 節）

・聖公会の聖餐式では、陪餐の際に余った聖別されたウェハースは、司祭がその場ですべて食べてしまいます。大きな礼拝の際にはかなり多めにウェハースを用意するため、すべてを食べるのも一苦労です。
・それと今日の箇所とに関連があるかはわかりませんが、「聖なるもの」は祭司職にあずかる人だけが食していたようです。煮る場所も「聖なる場所で」と決められており、また他の人にも食べさせることも禁止されています。
・翌日に残すのもダメ。残ったらお腹を空かせた人にあげたくなるところですが、それもダメだということです。何だか食べ物を粗末にしているように思ってしまうのは、わたしだけでしょうか。

（11 月 13 日）「出エジプト記 29：35～37」
七日の間、祭壇のために罪の贖いの儀式を行って、聖別すれば、祭壇は神聖なものとなる。祭壇に触れるものはすべて、聖なるものとなる。
（出エジプト記 29 章 37 節）

・今年は 12 月 24 日が日曜日になります。そのため朝から降臨節第 4 主日の礼拝、昼から降誕日の祝会、夕方に二回イブ礼拝をして、深夜礼拝をおこないます。25 日月曜日にも、朝から降誕日の聖餐式をおこないます。
・「うわ～、大変！」と思うかもしれません。でも考えてみてください。アロンたちの任職式や祭壇のための贖いは、七日間続けられました。一日や二日の礼拝で、悲鳴をあげている場合ではないのです。（というより、そもそも礼拝は喜びです）
・七日間贖いをされた祭壇は聖別され、最も聖なるものとなります。そのためそれに触れたものも、すべて聖なるものとなりました。そのため罪を犯した人が、その罪から逃れるために祭壇に触れたという物語も旧約聖書の中には登場します。

（11 月 14 日）「出エジプト記 29：38～46」
彼らは、わたしが彼らの神、主であることを、すなわち彼らのただ中に宿るために、わたしが彼らをエジプトの国から導き出したものであることを知る。わたしは彼らの神、主である。　（出エジプト記 29 章 46 節）

・一日に二匹の小羊を祭壇の上にささげるように、神さまは命じられます。年間 700 匹以上です。ノアの箱舟のときにも「いけにえ用の動物」が一緒に乗せられていましたが、そのあたりは割り切らないと仕方がないのでしょうか。
・新共同訳聖書で「臨在の幕屋の入り口」と訳されていた場所は、新しい聖書では「会見の幕屋の入り口」となりました。神さまは、「わたしはその場所で、あなたたちと会い、あなたに語りかける」と約束されます。
・神さまが来てくださる場所を用意する。まるで神社の鐘を鳴らすところのようなイメージです。しかしイエス様が遣わされたことによって、そのような場所は必要なくなったのです。

（11 月 15 日）「出エジプト記 30：1～10」
あなたたちはその上で規定に反した香や焼き尽くす献げ物、穀物の献げ物、ぶどう酒の献げ物などをささげてはならない。
（出エジプト記 30 章 9 節）

・一辺が 1 アンマ（約 45cm）の正方形で、高さが 2 アンマ（約 90cm）の祭壇を造るように、神さまは命じられます。その祭壇の上面と側面と角とは純金で覆われ、周囲には金の縁飾りが作られます。
・その祭壇で、一日二回香をたくように命じられます。仏教の線香もそうですが、そのような香りを届けるということに、大きな意味があったようです。「日々のおつとめ」が求められていたということです。
・さらに年に一度、アロンは祭壇の角のために贖いをしなければならないそうです。このあたりの規定をみると、随分わたしたちのキリスト教とは違っているなあという印象を受けます。朝夕の礼拝は聖公会でもありますが。

（11 月 16 日）「出エジプト記 30：11～16」
あなたがイスラエルの人々の人口を調査して、彼らを登録させるとき、登録に際して、各自は命の代償を主に支払わねばならない。登録することによって彼らに災いがふりかからぬためである。
（出エジプト記 30 章 12 節）

・古代イスラエルにおいて、人口調査は災いをもたらすことだったようです。人口を調べるということは、兵士の数を調べることと同じ意味です。それはすなわち、神さまの力を全面的に信頼していないことにもつながるのです。
・この命の代償（贖い金）は、1 人につき半シェケルです。イスラエルの人たちはこのお金を支払うことにより、神さまからの災いを逃れることになります。「賠償金」のようなものです。
・そしてこの金額は、貧しい人も富める人もみな等しく、変わらないというところに大きな特徴があります。これは、神さまの前にはみな平等であることを示しているのです。